

【学会レビュー】

イメージ心理学会の開催をふり返って

野田 満*

2014年9月4日(木)と5日(金)の両日にわたり日本イメージ心理学会15回大会を江戸川大学で開催することが出来た。以下は回顧録として学会開催をふり返ったものである。筆者が江戸川大学に移って1年経った年の春に、旧知の山形大学の畠山孝男先生から次年度の学会の依頼があった。まずは開催したい旨を学科会議に打診することとなった。すぐに福田一彦先生と松田英子先生が協力に応じてくれた。副委員長に高澤則美先生が加わった。学外からは文教大学の岡田斉先生がオブザーバー的なかたちで入ってくれた。学会のテーマは「イメージとからだの動き」と定めた。自らの研究テーマに近づけてのことである。慎重を要したのは学会の日程であった。当初の段階から9月を想定していたが、多くの心理学会が開催されるシーズンのはじまりなので、関連する学会の開催日を極力避けるように最終日程を選定した。しかしハプニングがあった。文教大学の大学院入試と重なっていることに、後で気づかされる。他学会の日程に目を向けていたが、主要なメンバーのいる大学の学内行事にまで目が届いていなかった。土曜・日曜開催を考えていたが、急遽日程を2日繰り上げ調整することとなった。大学内における事務方、企画総務課から学会開催での全面支援を受けた。学長に報告した際には、小規模でも学会を開くことは個人的に大変良いことと励まされる。会員数100名ほどの小さな学会であるが、公に大学の宣伝にもなると考えインターネットで申し込みを出来るかたちにした。その際には学術情報部のみなさん、特に中村佐里氏の協力があっ

たことは大変助かった。

学会宣伝用のポスターには苦勞した。当初の作成にはダビデ像が入っていたのだが、使用が難しいことが判明し、急遽作り直すことになった。新緑の季節でもあったのでA棟を出たところの大学並木を写真に収め用いることとした。学生によるヘルプデスクの中でも美術に関心のあるメディアコミュニケーション学科の荒生奈々代さんに協力してもらい、推敲を何度も重ねて美しい仕上がりに出来上がってきた。並木は自然のドームのように映り、大学の美しいシーンが活用できたように思う。会場は当初、B棟の5階を想定していたが、夏のオープンキャンパスの利用予定と被ってしまい、大会会場を少人数ではあるが大教室であるメモリアルホールへと変更するかたちをとった。

夏は最終的な大会プログラムの発送期限に追われた。1号通信の内容は前回大会に準拠したが、プログラムは新たな内容であるので発表の配置から校正まで一括して行った。他の学会で発表することがあったのだが、大変いそがしくWashington DCでタブレットと本大会の資料を持ち歩いていたことを覚えている。

前日までに会場づくりを行った。メモリアルホールに横断幕で「日本イメージ心理学会第15回大会」と掲げられるとさすがに身の引き締まる思いがした。この横断幕と大学正門や学会会場前の立て看板、さらには演者の題目等はすべて毛筆である。企画総務課の村竹恵子氏によるこれら堂々とした書字は会場に重厚感を与えてくれた。杉山保憲課長や坂井卓行氏からは適切なアドバイスや詳細な手配や工面をしていただき本当に助かった。

大会準備委員長は筆者であるが、副委員長に高

2015年1月21日受付

* 江戸川大学 人間心理学科教授 認知発達心理学

澤則美先生、準備委員に文教大学の岡田斉先生、本学から準備委員として福田一彦先生、松田英子先生、浅岡章一先生、住吉文子氏が担ってくれた。多くは主なシンポジスト・講演者と重なる。学会の開始にあたって社会学部長の親泊素子先生からご挨拶をいただいた。学長は既に予定が組まれ、欧州視察中ということもあり日本に不在であった。実はこの時の親泊先生のご挨拶の話は、イメージ心理学研究者のあいだで大変関心を引く内容であった。録音があるので再び聞いてみたい。

特別講演では高澤則美先生が「ポリグラフ検査からだの反応を利用した心理生理学的検査」と題して先陣を切った。シンポジウムⅠ「睡眠とイメージ」では、福田一彦先生が「睡眠中に体験するイメージ-夢から金縛りまで-」、松田英子先生は「悪夢の認知行動療法-イメージ・エクスポージャーの利用」を話題提供された。2日目のシンポジウムⅡ「身体性とイメージ」では北海道大学の今井史先生が「運動と操作対象のイメージ」、筆者は『『ひきうつし』という手操作方略のイメージにおける役割」、文教大学の今野義孝先生からは「動作法による『頭モード』の解決様式から『身体モード』の解決様式へのシフト-鏡映描写とストループ課題を用いて-」がそれぞれ話題提協され活発な議論が行われた。また、1日目の研究発表として、岡田斉先生・若佐谷契先生による「聴覚障害者の夢見に関する調査」、畠山孝雄先生・岸紘秀先生の「説明場面におけるジェスチャーの発現頻度とイメージ個人差との関連」、2日目は森本琢先生の「評定における偏向の個人差を考慮した VVIQ 得点の補正に関する提案」、廣瀬健司先生・菱谷晋介先生の「無彩色刺激の観察がイメージの鮮明度に及ぼす影響」が発表され、議論が深まった。懇親会は A 棟 8 階の会議室を利用しなごやかな歓談の時間を持つことが出来た。特別に頼んでおいた千葉成田の銘酒長命泉も人気があ

った。

研究発表後は、北海道から九州まで参加された先生方が帰路につく学バスを見送った。手伝い学生の諸君と後片付けを行っていったが、今回、会場づくりから最後まで手伝ってくれた 8 名の野田ゼミ生、船木飛鳥さん、柳澤裕太君、木下裕紀子さん、石田美絵さん、大槻真子さん、宮本亘君、平賀冴楓さん、高橋美芙祐さんは学部生でありながら大変よく対応してくれたと思う。受付や撮影記録・照明、タイムキーパー等諸事にわりよくやってくれた。また彼らを統括してくれた住吉文子さんには感謝している。

こうして小さいながらも手作り感のある学会を開くことが出来て、今思うと感慨深い。充分なおもてなしは出来ただろうか。後日、学会運営委員長の大石昂先生（本学会では理事長にあたる）から感謝状とは別にフェイスブックに書かれた内容のメールが届いた。

「イメージ心理学会を開催した江戸川大学は、開学 25 年ほどの 2 学部の文系大学ですが、つくばエクスプレスの開通で東京からの受験生も増えている発展中の大学です。感心したのは、近年の小規模私学が『4 年制の専門学校』化している中で、研究を重視し、何と 5 つの研究所、中でも『睡眠研究所』というテレビにもよく登場しているユニークな研究施設を持っていることです。今朝の毎日新聞では、京都大学の次期学長に予定されている山極寿一氏が、『大学で学生たちは本物の学問に出会う。それはいまだ解のない世界であり、先人たちが未知の解を求めて苦闘した歴史である』と述べています。研究を忘れた大学、『未知の解』を探ろうとしない教員は、現実に創造的に取り組む学生を育てることはできないと改めて思った学会でした。」

勇気のわく言葉であった。次への歩みを開けたと思う。